

京都大学	博士（文学）	氏名	波勢 邦生
論文題目	賀川豊彦の終末論		
（論文内容の要旨） 序論 賀川豊彦（1888-1960）に関する本格的な研究は、彼の没年となる1960年以降に編纂された『賀川豊彦全集』を契機として開始された。しかし、彼の戦後の神学思想、特に終末論に関わる研究は僅少な状態が続いている。その原因の背景として挙げられるのが賀川の瑕瑾「差別発言・戦争協力・天皇制礼賛」であり、これらによって彼の思想そのものの意義に疑義が呈されたために、その分析や研究が滞っていたと言える。 本研究は、上述の状況を鑑み、終末論の観点から瑕瑾の発生原因を明らかにした上で、賀川豊彦の神学思想を詳らかにすることを試みるものである。研究主題として終末論が選択される理由は、彼の思想の独自性と特徴が、彼が若い頃より一貫して関心を抱き続けてきた終末論という観点からこそ浮き彫りになるからである。本論では、特に戦後から死没までの賀川豊彦に着目し、晩年の主著『宇宙の目的』とコラム群『不尽油壺』を分析することで、その神学思想と終末論を抽出することを目指した。 序論においては、本研究の研究史上の位置付けを示し、先行研究などを概観した上で補完すべき点を明確にするとともに、2010年代以降の賀川周辺の神学研究を一覧し、教義学としての終末論について述べた。次に、思想分析を行う前提として、賀川豊彦の思想的発展と生涯を前期から後期に区分し、後期の賀川思想を本論が扱う理由を指摘した。その上で、本論が扱うべき資料と方法について検討し、また分析対象としての『賀川豊彦全集』が内包する欠陥や問題について適示した。 第1章 賀川豊彦の神学 本章では、賀川の神学を扱い、特に教義学的な語彙を析出した。賀川思想において、天父と天国は教会やキリスト教徒に限定されない広がりを持っており、また賀川の神は、労働する父子神を含意している。人々は、その神の事業への参与、贖罪愛への献身によって、三位一体論的に超越・内在・表現する「意識と経験」を得て、それが協同化することで社会変革が可能となるとされる。他方で、賀川思想には「贖罪愛の序列と進化」と呼ばれる階層構造が存在し、神や天皇などだけでなく、人々をある種の優生思想に基づいて序列化するこの階層構造ゆえに、賀川は時代の制約の中で差別的とも取れる発言を行い、戦争に協力し、戦後も天皇を敬愛した。 また、賀川にとって神は、罪の下にある人間を再創造（創造・保存・修繕）してくれる宇宙の心である。その心に出会い、救われた者は、苦と罪と悪の問題を修繕するために立ち上がる宇宙宗教の徒となって贖罪愛のために献身するようになる。だが、賀川がこのキリスト教的救済の形式を、彼の説く独特な進化論と贖罪愛のための殉教			

によって補強したために、賀川豊彦の瑕瑾「天皇制・差別発言・戦争協力」につながるものと見做され、思想全体の価値が貶められた。

しかし、賀川の意図は、戦争によって殉教することにあるのではなく、この贖罪愛の序列と進化の中で、人々を「意識と経験」へと招くことを強調する点にあった。というのも、招かれた人々の下座奉仕が、神の国を拡大していくからである。贖罪愛の序列と進化は、まさしく賀川の世界観にとって、歴史を未来そして終末へと前進させていく力であり、その中心に位置するのがイエス・キリストの十字架への献身である。そして十字架は、生命に内在する目的論的、エンテレキエの表れでもあった。

第2章 終末における聖霊の力

本章では、まず賀川の終末論の由来として、A.シュヴァイツァー（1875-1965）の思想がどのように関わったかについて考察した。賀川はシュヴァイツァーの終末論を咀嚼した上で、「進行的終末論」を唱えて神秘家として歩んだ。具体的に言えば、賀川は予言と幻視を進化した意識の力として捉えており、またそれらは彼の信仰共同体においても共有されていた。従来の賀川研究では、彼の予言や幻視は単なる文学的表現と見做されていたが、上述のような分析に照らすならば、これらは賀川自身の現実描写の一つとして分析することも可能となる。他方で、賀川は、終末における聖霊の力「霊魂力」を想定し、その内実に永遠の生命、死など、彼の個人的終末論が展開されている。「霊魂力」は進行的終末論と連動しながら、人類が神的進化へと進む徴であり、賀川の神学的世界観における柱梁構造「七要素」に沿って発揮される。この七要素とは「生命、力、成長、変化、選択、方法、目的」を指し示しており、賀川自身はキリスト教の文脈を離れた自然哲学的な表現としてこれらを用いているが、宗教的な文脈では聖霊の働きの別名とも見做され得る。というのも、終末における聖霊の力「霊魂力」は、「七要素」によって社会、宇宙を包摂し、それによって聖書の黙示録における新しいエルサレムが成就するからである。尚、その在り方は理想的な田園都市のようなものであり、賀川はそれを100年後の日本の姿と重ね合わせている。

また、賀川は、イエス・キリストの「意識と経験」を経て贖罪愛に挺身し、終末における聖霊の力「霊魂力」によって未来を予言・幻視しつつ、救済の希望へと前進しようと試みていた。

第3章 賀川豊彦の宇宙

本章では、賀川晩年の主著『宇宙の目的』、コラム群『不尽油壺』を、特に「意識と宇宙」の観点から読解した。『宇宙の目的』は賀川其自然哲学的な議論が展開されているが、コラム群『不尽油壺』では彼の自然神学的表現が見出される。両者を補完的に読解することで、賀川が構想した宇宙と神的進化を総合的に把握する可能性が見出された。

『宇宙の目的』は三部で構成されており、第一部「自然選択の方向性」において、

賀川は合目的性とエンテレキーを同一視し、自然選択が神的進化へと働くことを指摘する。その合目的性の諸法則は「七要素」と呼ばれ、進化をもたらす「意匠、根、先験的選択性」として理解される。この前提で、彼は「土＝膠質（コロイド）」に注目し、宇宙における「土」の存在と旧約の創造論が矛盾しないことを慎重なかたちで示唆している。第二部「生命機構の潜在目的性」では「生命の起源」が語られ、彼は自身の立場を「全体性生命観」と宣言する。遺伝と性別が「合目的性」に沿っており、生存競争とその平衡状態に「意匠」があるとされる。有性生殖を重視する賀川は、この生存競争にも純潔を持ち込んでいる。第三部では「悪の起源」が論じられる。悪は進化の変転の歪みと説明されるが、「七要素」を大胆に展開し、人間の「意識」を解説し、心と自我の生成を示し、その先にある「靈魂力」が悪への対策と見做される。賀川は、人類と他生物の進化の可能性を過去に基づいて楽観視しつつ、「宇宙の究極目的」は不明であるが「宇宙意志」に導かれる「夜明け」への期待を表白する。

コラム群『不尽油壺』では、賀川其自然神学的発想を「意識」の観点から分析し、特に彼の神的進化、宇宙進出への構想が明らかにされる。それは贖罪愛による精神的進化であると同時に、宇宙規模の経済圏の構想である。だが、それは賀川の死去によって未完の著作の可能性として提示されるに留まった。

終章 賀川豊彦の終末論

本章では、賀川豊彦の終末論を先行研究の議論に即して教義学的な区分を適用して考察しつつ、賀川の終末論の定位を試みた。まず、最初の区分としての「個人的終末論」であるが、彼にとって個々人の死は進化の過程における必要悪と見做されており、贖罪愛によって立ち向かうならば、それは「変化」として理解される。「変化」とは、肉体から霊体への進化、即ち永生の獲得として理解され、神の記憶に保持されることである。聖書的象徴である再臨と復活は、あくまで歴史内の自然現象として相対化されて解釈され、個々人の救済可否は、悪の問題として宙吊りにされたまま、やがて判明すると楽観視されている。次に、「歴史的終末論」と「宇宙論的終末論」は、賀川の場合、神的進化論や進行的終末論のプロセスとして理解される。生命の神は、物質にエンテレキーと呼ばれる合目的性を与えている。このエンテレキーが、無機物から有機物、有機物から生命、生命から意識、意識から神へという神的進化の階段を動かしている。これは「靈魂力」や「全意識」とも呼ばれ、宗教と科学を統合的に把握する場であり、力、歴史を貫く「七要素」や贖罪愛として顕現する。この贖罪愛が、歴史を終末へと前進させる原動力であり、個々人の内発的变化のみならず集団と社会をも変革し、やがて歴史を変え、人類や被造物世界の全体を変えていくと見做される。そして、「修繕の原理」と呼ばれる予定論にも似た極めて強い力が歴史の方向性を宇宙の目的へと運び始める。彼の初期の詩作『終末のラッパ聞こゆ』で示されるように、賀川思想においてキリストの再臨による破局的終末、または究極的な歴

史の宇宙論的完成は、彼の著作からは明確に論じられないが、一般的な意味での物理科学的宇宙としての時間ないしは歴史の終局や、宇宙の熱的死は存在している。

賀川は、教義学的な終末論の最終項目である神の栄光において、宇宙の熱的死の果てで「意識」が目覚め、神の笑顔に会うと理解している。歴史の終極の先で、物質と精神が創造論的に相互浸透し、悪の問題に立ち向かうために贖罪愛によって再創造され、永遠と時間、超越と内在が全意識において一体化する。そして、究極の神人協力説ともいえるかたちで、歴史という救済過程の向こう側で、神と人が共に栄光それ自体となるとされる。

このような分析に続けて、本論は賀川の終末論を先行研究に基づいて定位する。19世紀以降の終末論の歴史的展開を分類化した芦名定道の研究に沿うならば、本論で分析した賀川の終末論は部分的には「未来の事柄としての終末」として位置付けられるが、他の分類の要素も包含している。賀川は倫理化した終末論から出発し、黙示文学的な終末論の再発見と、価値領域の事柄としての終末論を合成して、弁証法神学とは別の仕方で終末論を現在化した。賀川の終末論の特徴は、神を「生命」と言い換えるほど、その統一性と相互独立性について強調した点にある。また、晩年の主著『宇宙の目的』において、非人間的主体による目的成就の可能性を示唆することで宇宙における人間の脱中心化、奉仕の道を開いた点も指摘される。さらに、人間のみならず、抑圧された被造物との連帯可能性として解放の神学とも接近しつつ、神との協働者としての人類に与えられた使命への促しとして、人類が生命の目的へと至るために宇宙において特別な地位を与えられたと理解している。賀川の終末論は、宗教と科学と自然の対話の場であり、自然環境を含む総合的な議論であった。

結論

賀川豊彦の終末論は「進行的終末論」であった。人類は、生命の神、すなわち宇宙の親心の意識に目覚めたイエス・キリストの「意識と経験」に招かれて、父子神の労働へと参与することで、贖罪愛の発露、下座奉仕による神の国形成へと献身する。それは、苦・罪・悪に対抗し得る創造・保存・修繕のシステムである「贖罪愛の序列と進化」への参加でもある。この点において、研究史上の課題としての賀川豊彦の瑕疵が発生していたが、それと同時に、そこでは「神的進化」への道程が開かれ、人類には終末における聖霊の力「靈魂力」が与えられるのである。靈魂力は「七要素」として神の国を拡大し、人類を宇宙の目的の直前まで導くものである。賀川は、シュヴァイツァーの終末論を咀嚼することで、上述のような「進行的終末論」を唱えた。

以上のように、本研究は、賀川豊彦の終末論の特徴と意義を明らかにした。資料分析の不足など、研究としての不備は否めないが、本研究が析出した賀川豊彦のキリスト教思想の在り方、特に終末論に関しての見立ては、今後新たな資料や研究が蓄積されたとしても、保持し得ると考えられる。

(論文審査の結果の要旨)

日本の社会事業活動の確立に多大な貢献をした賀川豊彦(1888-1960)は、中学時代に受洗した後、青年期に神戸およびアメリカの神学校でキリスト教神学を修めた。その後、伝道と労働運動に献身的に従事する一方、宗教や科学などの学術的書物だけでなく小説や児童書など多種多様な執筆活動を通じて、第二次世界大戦前後の日本社会に広く影響を与えた。従来、賀川の文学的作品やその労働運動への関わりについては広く研究がなされていたのに対し、その思想的基盤となる彼のキリスト教思想に関してはこれまで十分な研究がおこなわれてこなかった。彼の死後、その著作が(実態にはそぐわないものの)全集という名目で出版され、形式的には研究の土台が準備されていたにもかかわらず、彼の思想的研究が停滞していた明確な理由の一つとして指摘されるのは、賀川思想に組み込まれた三つの瑕疵、すなわち戦争協力、天皇制支持、差別発言である。尚、ここでの天皇制支持は、帝国主義的な文脈とキリスト教思想的な文脈との双方で問題とされうるが、この瑕疵は彼の推進しようとした平和運動と齟齬をきたすと見做されており、このことから賀川思想的研究を進める意義や価値が疑問視されたことが、賀川研究の発展を妨げてきたと言える。だが近年になって、海外の研究者による賀川思想研究の意義の再検討などを通じて、彼の発言の真意が曲解された可能性が指摘され、彼の思想的な部分にも焦点が当てられるようになってきている。波勢氏による本論文もこのような潮流の中に位置付けられる。

本研究は、賀川思想を通底する最も重要な概念の一つとして、終末論を取り上げている。我々の住む宇宙がどこに向かい、いかなる神的摂理によって維持され、どのような目的をもつのか、そのために我々はいかなる社会的実践等を通じて終局点を迎え、それを待望すべきかを明らかにすることが、賀川が青年期より抱き続けてきた思想的課題の一つであった。それゆえに、彼の終末論を分析することは、キリスト教的関連性だけでなく、賀川思想の全体像を明確にするために必要なことであると波勢氏は論じている。ここでは、その考察の手掛かりとして、賀川が晩年に著した『宇宙の目的』と、長期間新聞コラムとして連載した『不尽油壺』が主たる分析の対象とされている。それらは、賀川が抱いてきた終末論的思考の集大成の一部であり、これらの著作群の中に彼の思索の到達点が最も明確に表れていると指摘されている。さらに、終末論分析に必要となる神や聖霊などの神学的概念に関しては、上述のものに限定せず、賀川の初期から後期までの著作を網羅的に分析することで、賀川の著作全体において、上述のテキストがどのように位置付けられるかが考察されている。

波勢氏の分析に拠れば、賀川の上述の二つの著作群は、終末に向かう宇宙的進化の道筋を明らかにするものであるが、その著述の在り方は明確に異なっており、『宇宙の目的』が自然科学的見地から宇宙が向かう終局点を模索するのに対して、『不尽油壺』はコラム集という短い著述の中で神学を前面に据えつつ、贖罪愛という道徳的価値基準の序列と、聖霊を通じた人間の意識変革によって終末を迎える在り方が論じら

れている。これらの分析を通じて得られる賀川の終末観は、本論文の終章において再検討されており、彼が青年期に『基督伝論争史』の中でA.シュヴァイツァーの議論を手掛かりに展開した「進行的終末論」の意義が、ここで初めて十全に考察可能となる。それに拠れば、賀川は単純に終末における神の国の到来を内在的なものか未来的なものかの二者択一的に捉えていたのではなく、神の国をイエス以後から未来にまで前進的に進展し続ける運動として理解したのである。

本研究は、賀川の終末論を明らかにする過程で、彼の思想研究の停滞など研究史的な考察も分析の射程に組み込んでいる。そこでは、冒頭に挙げた賀川の瑕疵の一つである差別思想と言われるものが、優生思想に基づいて市井の人々を蔑むことを意図していたのではなく、彼らがキリストによる贖罪愛の序列の中で上昇し、救済に向かう可能性を説いていたのである。賀川自身がそうした人々よりも低い最底辺の罪人であると自己認識していたことから、単なる差別思想では汲み取れない意味があった点が鋭く浮き彫りにされている。このような分析を通じて、賀川思想研究の意義を再検討し、また国内外でこれまで公刊されてきたこの分野の研究を網羅的に分析した上で、明確な問題を設定し、それを論じた点で波勢論文は独自の意義を持つと言える。

以上のように、本研究には独自の着眼点をもつ優れた点が見受けられるものの、改善すべき点も多く散見される。まず指摘すべきは、賀川概念等を整理し、論理的かつ体系的に叙述する力の不足である。「霊魂力」や「エンテレキー」など、賀川が独自に用いる概念は多々あるが、本研究ではこれらの鍵概念が十分に整理したかたちで説明されたとは言にくい。複数の著作から該当箇所を引用してはいるものの、それらの文脈を精査した上で丁寧かつ体系的に議論する作業が求められる。もちろん、賀川自身の記述の不明瞭さなどは考慮すべきであるが、本論文は複数の概念を安易に同義と見做して代替可能と論じており、説明や考察が不十分であると感じられる箇所が多々見られた。また上記に関連するが、「聖霊」と「七要素」など、幾つかの鍵概念を別の単語と単純に同義語ないしは互換的なものと見做したことで、論理的な整合性が十分に保持できない箇所も幾つか散見された。さらに、賀川の終末観を分析した上で、それが日本やアジアのキリスト教思想史においてどのような独自性を持ち得るかなど、賀川思想の特徴と意義を更に踏み込んだかたちで論じる必要性が指摘される。

しかし、こうした問題点は本論文の意義を著しく損なうものではなく、賀川思想研究の端緒を切り開くという意味では十分な意義をもっており、今後の研鑽において上述の改善すべき点についても克服することが期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2024年5月17日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。